



宮城県登米市、栗原市、岩手県一関市、平泉町の平成28年度第1回首長懇談会は4月27日、宮城県登米市で開かれました。この懇談会は、人口減少、少子高齢化など、さまざまな課題を解決するため、登米市、栗原市、一関市が昨年度から県境を越えて実施している話し合いの場。本年度から平泉町も加わりました。

布施孝尚登米市長は「地方創生が叫ばれる中、近隣自治体で争うのではなく、相乗効果を出す視点が大切。県境を越えたこの取り組みが全国のトップランナーとなるようにしていきたい」とあいさつ。

佐藤勇栗原市長は「この地域の発展に欠かせない国際リニアコライダー（I-LC）誘致につ

いても連携して取り組みたい。また、観光事業で連携していくことはすばらしいこと」と期待を込めました。

初参加となる青木幸保平泉町長は「人口減少対策にはどの自治体も取り組んできた。国の考え方に地方の発想を取り入れてもらえるよう連携したい」と話しました。

勝部修一関市長は「住民の行動範囲を前提とした施策を展開し、県境をまたいだ自治体同士が国に要望することも必要。一丸となって情報発信していければいい」と広域的な取り組みの重要性を話しました。

本年度、4市町の連携事業として「観光パンフレットの設置」「観光キャラバン」「婚活事業」を実施することが確認されました。

宮城県登米市 布施 孝尚 市長


1961年宮城県登米市生まれ。日本大学歯学部卒。97年から登米郡歯科医師会理事。2000年から宮城県歯科医師会理事。05年登米市長に初当選。現在3期目。



ふせ・たかひさ 54歳

宮城県栗原市 佐藤 勇 市長


1942年兵庫県三田市生まれ。立教大学文学部卒。83年に宮城県議会議員に初当選し、5期にわたって務めた。01年から03年までは、同議会議長を歴任。05年、市長に初当選。現在3期目。



さとう・いさむ 73歳

岩手県一関市 勝部 修 市長


1950年岩手県一関市生まれ。垂細垂大法学部卒。74年に岩手県庁に入庁。総合雇用対策局長、総合政策室長、県南広域振興局長などを歴任。09年、一関市長に初当選。現在2期目。



かつべ・おさむ 65歳

岩手県平泉町 青木 幸保 町長

1954年岩手県平泉町生まれ。岩手県立水沢農業高校卒。88年に町議会議員に初当選し、08年から14年まで同議会議長、13年から岩手県町村議会議長会長を歴任。14年、町長に初当選。現在1期目。



あおき・ゆきお 62歳

●これまでの経過／2015年4月…第1回3市首長懇談会／11月…一関市で栗原市長による首長講演会開催／12月…第2回3市首長懇談会。平泉町に対し、首長懇談会への参加要請。一関市で3市合同婚活

クリスマスパーティー開催／16年1月…栗原市で登米市長による首長講演会開催、登米市で一関市長による首長講演会開催／4月…登米市で4市町首長懇談会開催

*このページは、宮城県登米市、栗原市、岩手県一関市、平泉町が作成し、各市町で同じ内容を掲載しています。

[Pick_Up]

登米市、栗原市、一関市、平泉町首長懇談会を開催

県境を越える連携で
新たなまちづくりを



1 岩手県平泉町

- 面積 63.39平方キロメートル
- 人口 7,906人(28年4月1日現在)
- 概要 1955年4月1日に平泉町と長島村が合併、本年度合併60周年を迎える。2011年6月29日、「平泉の文化遺産」が世界文化遺産に登録。年間約200万人の観光客が訪れる。

2 岩手県一関市

- 面積 1,256.42平方キロメートル
- 人口 121,735人(28年4月1日現在)
- 概要 2005年9月20日に一関市、花泉町、大東町、千厩町、東山町、室根村、川崎村の1市4町2村が合併し、さらに11年9月に藤沢町を編入。

3 宮城県栗原市

- 面積 804.97平方キロメートル
- 人口 71,222人(28年4月1日現在)
- 概要 2005年4月1日に築館町、若柳町、栗駒町、高清水町、一迫町、瀬峰町、鶯沢町、金成町、志波姫町、花山村の9町1村が合併。宮城県で最も広い面積を有し、稲作中心の農業が盛ん。栗駒山や伊豆沼などの観光地も有名。

4 宮城県登米市

- 面積 536.12平方キロメートル
- 人口 82,487人(28年4月1日現在)
- 概要 2005年4月1日に迫町、登米(とよま)町、東和町、中田町、豊里町、米山町、石越町、南方町、津山町の9町が合併。県内有数の穀倉地帯となっている。旧登米高等尋常小学校や伊豆沼などの観光地も有名。

あいな人 File_38
いちのせきを愛する人

2015年度農水省の食アメニティ・コンテスト奨励賞受賞

千葉秀子さん

Chiba Hideko 75 川崎町薄衣



まごころ込めた「かにばつと」
伝統とぬくもりを次代へつなぐ

地域に伝わる伝統食「かにばつと」の伝承活動などに取り組む千葉秀子さん。農林水産省の2015年度「食のアメニティ・コンテスト」で奨励賞を受賞しました。

かにばつとは、地元産のモクズガニを使った風味豊かなスープに、旬の野菜と手作りのはつとを加えた郷土食です。モクズガニは、北上川とその支流で9月から11月頃まで捕獲される食用ガニ。ハサミに藻のような柔らかい毛がついていることからそう呼ばれます。

秀子さんがかにばつとを作ったのは、今から25年ほど前。地元でカニ取り名人と呼ばれていた近所のおじいさんから教わったのがきっかけ。地域のイベントで何度か振る舞ったところ、独特の風味が「泥臭い」と言われたり、はつとが固まってしまったりと、うまく調理できませんでした。

誰でも食べられる味を目指して、調理方法や材料となるカニの保存方法を試行錯誤。材料のカニみそを真空冷凍することで長期保存が可能になり、限られた季節しか食べられなかったかにばつとが、年中食べられるようになりました。

この活動が県に認められ、1996年に「食の匠」に認定されました。地元の味を残したいと、99年には自宅を改装し、農家レストラン「ぬくもり」をオープン。自慢の料理を振る舞いました。

そんな秀子さんに「レストランを経営しては」と、道の駅かわさきから話を持ちかけられました。今の年齢で店を構えることは難しいのではと、迷いましたが「地元の人が私に伝統の味を教えてくれたように、私も次の世

代に味を伝えなくては」と開店を決意。昨年10月にレストラン「ぬくもり」をオープンさせました。メニューは、かにばつと、餅料理を中心とした20種類あまり。特にかにばつとは、カニ取りの最盛期である9月以降にしか提供できないほど、好調な売れ行きです。

「カニを取ったり下処理をしたりしてくれる主人の支えがあるから続けられる」と夫・庄平さんへの感謝を忘れません。

好きな言葉は「まごころ」。まごころを込めた郷土の味は、伝統とぬくもりを次の世代へとつないでいます。

Profile

1941年千厩町生まれ。地元高校を卒業後、61年、庄平さんと結婚。川崎町へ。農業の傍ら、食生活改善グループで郷土食「かにばつと」の伝承に取り組む。96年に県の「食の匠」に認定。99年自宅を改装し、農家レストラン「ぬくもり」を始める。昨年10月から道の駅かわさき内にレストラン「ぬくもり」を開店。

COVER STORY

若手の消防隊員が救助技術の訓練に励む



消防隊員が救助の技術を磨く訓練塔。はしごの高さは15メートル。

消防救助の技術を競う大会に向け、救助技術訓練が6月28日まで一関西消防署や一関東消防署で行われています。競技は「障害突破」や「ロープブリッジ救出」など6種目。訓練には、市内の消防署から選抜された若手の隊員29人が参加しています。

15メートルのはしごを登るスピードと正確性を競う「はしご登はん」に挑む一関北消防署の吉田貴博消防士長(27)は「ミスを最小限に抑える。県大会トップで、全国大会に進みたい」と意気込みました。県大会は29日に矢巾町で開催されます。